

**[D年] 聖霊降臨節第14主日(2024年8月18日)****【旧約聖書日課】出エジプト記 34章4～9節**

4モーセは前と同じ石の板を二枚切り、朝早く起きて、主が命じられたとおりシナイ山に登った。手には二枚の石の板を携えていた。5主は雲のうちであって降り、モーセと共にそこに立ち、主の御名を宣言された。6主は彼の前を通り過ぎて宣言された。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、7幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。」8モーセは急いで地にひざまずき、ひれ伏して、9言った。「主よ、もし御好意を示してくださいますならば、主よ、わたしたちの中であって進んでください。確かにかたくなな民ですが、わたしたちの罪と過ちを赦し、わたしたちをあなたの嗣業として受け入れてください。」

**【使徒書日課】****ローマの信徒への手紙 7章1～6節**

1それとも、兄弟たち、わたしは律法を知っている人々に話しているのですが、律法とは、人を生きている間だけ支配するものであることを知らないのですか。2結婚した女は、夫の生存中は律法によって夫に結ばれているが、夫が死ねば、自分を夫に結び付けていた律法から解放されるのです。3従って、夫の生存中、他の男と一緒になれば、姦通の女と言われますが、夫が死ねば、この律法から自由なので、他の男と一緒になっても姦通の女とはなりません。4ところで、兄弟たち、あなたがたも、キリストの体に結ばれて、律法に対しては死んだ者となっています。それは、あなたがたが、他の方、つまり、死者

の中から復活させられた方のものとなり、こうして、わたしたちが神に対して実を結ぶようになるためなのです。5わたしたちが肉に従って生きている間は、罪へ誘う欲情が律法によって五体の中に働き、死に至る実を結んでいました。6しかし今は、わたしたちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されています。その結果、文字に従う古い生き方ではなく、“霊”に従う新しい生き方で仕えるようになっていくのです。

**【福音書日課】ヨハネによる福音書 8章3～11節**

3そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、4イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。5こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」6イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。7しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」8そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。9これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。10イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」11女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めません。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 出エジプト記 34章4～9節

4そこでモーセは、前のような二枚の石の板を切り出し、朝早く起きて、主が彼に命じられたようにシナイ山に登った。手には二枚の石の板を携えていた。

5すると主は雲に包まれて降り、彼と共にそこに立って、主の名によって宣言された〔別訳→を宣言された〕。6主は彼の前を通り過ぎて、宣言された。

「主、主、憐れみ深く、恵みに満ちた神。

怒るに遅く、慈しみとまことに富み

7 幾千代にわたって慈しみを守り

過ちと背きと罪を赦す方。

しかし罰せずにおくことは決してなく

父の罪を子や孫に

さらに、三代、四代までも問う方。」

8モーセは急いで地にひざまずき、ひれ伏した。9そして、言った。「わが主よ、もし私があなたの目に適うのなら、どうか私たちの中にあって共に進んでください。かたくなな民ですが、私たちの過ちと罪とを赦し、私たちをご自身のものとしてください。」

## ローマの信徒への手紙 7章1～6節

1それとも、きょうだいたち、私は律法を知っている人々に話しているのですが、律法とは、人を生きている間だけ支配するものであることを知らないのですか。2結婚した〔直訳→男の下にある〕女は、夫の生存中は律法によって夫に結ばれているが、夫が死ねば、夫の律法から解放されます。3ですから、もし夫の生存中、他の男のものになれば、姦淫の女と呼ばれますが、夫が死ねば、その律法から自由な身となり、他の男のものになっても姦淫の女とはなりません。4それと同じように、きょうだいたち、あなたがたも、キリストの体によって、律法に対して死んだのです。そ

れは、あなたがたがほかの方、つまり、死者の中から復活させられた方のものとなり、私たちが神に対して実を結ぶようになるためなのです。5私たちが肉にあったときは、律法による罪の欲情が五体の内に働き、死に至る実を結んでいました。6しかし今は、私たちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されました。その結果、古い文字によってではなく、新しい霊によって仕えるようになったのです。

## ヨハネによる福音書 8章3～11節

3そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦淫の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、4イエスに言った。「先生、この女は姦淫をしているときに捕まりました。5こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」6イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書いておられた。7しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたの中で罪を犯したことはない者が、まず、この女に石を投げなさい。」8そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。9これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と立ち去ってゆき、イエス独りとなり、真ん中にいた女が残った。10イエスは、身を起こして言われた。「女よ、あの人たちはどこにいるのか。誰もあなたを罪に定めなかったのか。」11女が、「主よ、誰も」と言うと、イエスは言われた。「私もあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはいけません。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

- ・8月18日「聖霊降臨節第14主日」の日課主題は「霊に従う生き方」。
- ・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、金の雄牛事件後に「掟の板」を再授与されたことを物語る箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、結婚のたとえによって律法遵守に関する理解を説く箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「姦淫の女」の逸話箇所。

**旧約日課(出エジプト 34章より)**

- ・「出エジプト記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法(トーラー)」の第二巻、「申命記」までの四書で続く「モーセ物語」の第一部を構成する。「モーセ物語」を構成する四書の中で本書は、すでに一つの完結した内容を擁している。本書の物語は、「エジプトからの導き出し」、「シナイ山における律法授与」、「荒野における幕屋の造成」の三つの大枠によって構成されるが、これらはそれぞれ、「レビ記」以下の各書で繰り返し言及される三大祭、すなわち、過越祭=除酵祭、七週祭、仮庵祭において記念される故事となっている(レビ 23章、民 28~29章、申 16章)。もっとも、本書の物語展開は、単純な三部構成ではなく、各構成要素が相互に組み合わせられたものとなっている。
- ・日課箇所を含む34章は、全体として第三の構成部である「幕屋の造成」の中に配置されている「金の雄牛事件」の顛末を物語る箇所であるが、主題内容からは、第二の構成部である「律法授与」の展開部に位置づけられる。
- ・「シナイ山における律法授与」は、本書19~24章を中心に展開されているが、そこで神から授与される律法は、もっぱら神が告げる言葉をモーセが聞いたものであり、それを「民に読み聞かせ」(24:3)るものとして「文書化」した経緯は最後まで触れられていない。ただ、一連の説話が物語られた後で言い添えるようにして、「わたしは…石の板をあなたに授ける」(24:12)という神の言及が置かれるのみである。この最後に置かれた言及は、続く第三の構成部「幕屋造成」の中で「金の雄牛事件」との関連で「二枚の掟の板」(31:18)が取り上げられるための伏線として置かれていると見ることができる。すなわち、「二枚の掟の板」をモーセが受け取ることと並行して起こった「金の雄牛の造成と礼拝」が、最初の「掟の板」を破壊することに繋がり、民の嘆きを経て再度「掟の板」を授与してもらう逸話(34章)を引き出す、という展開になっている。
- ・日課箇所では、律法の再授与に際して、「金の雄牛事件」によって顕在化した問題が「罪と背きと過ち」に対して神はどう対処されるのか」ということであることが示されている。結論は「赦し」であるが、そこで問われるのは悔い改めである。この提題は、三大祭と並ぶ祭事「贖罪日」(レビ 16章他)の主題に対応する。

**使徒書日課(ローマ7章)**

- ・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。本書は、パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てて、教会を訪問し、その後のエスパニア伝道計画への協力を取り付けるべく著した書簡。パウロは、すでにローマ教会共同体のメンバーの一部とはコリント伝道を通して知己となっていたと考えられるが、それまでの経歴から十分な信頼関係を築くには至っていなかったとも推認される。そこで、彼自身がこれまで問題にしてきた主題を中心に、現時点でのパウロの理解をまとめ、共通の福音理解に立ち上ることを示すことによって、協力関係を築いていく上での信頼を得ようと試みている。本書については、資料「聖書と祈りの会 240717」なども参照。
- ・日課箇所では、「律法」に関する議論が取り上げられている。「律法」を福音理解の中でどのように位置づけるかを巡っては、「ガラテヤの信徒への手紙」における過激な主張にもかかわらず、パウロは、その後軌道修正をし、「コリントの信徒への手紙一」や本書簡では、丁寧な議論によって調停的な立場を取ろうとしている。すなわち、「ガラテヤ書」でパウロは、「律法」を「キリストの福音」によって完全に否定されたものであるかのように扱い、「律法」と「福音」を互いに相容れないものとして二律背反の主張を展開していたが、「ローマ書」では、「律法」が「ユダヤ人」という社会共同体の一員であることを枠づけるものとして機能している側面と、「神の言葉」として正邪を明らかにする機能を有している側面を持つことを示し、前者の機能で働く「律法」の意義を限定的に理解する主張を展開している。これらのパウロの主張の前提となっているのは、人が救われるのは「救いの共同体」に受け入れられることによってである、という旧約聖書に基づく救済観である。
- ・ユダヤ教徒としてのパウロは、「割礼」や「食物規定」という外形的な枠組みとして機能する「律法」を遵守することによって成立してきた「ユダヤ人共同体」を「救いの共同体」と同一視していた。しかし、「キリスト」との出会いによって、彼は、外形的な枠組みによらない包摂的な「救いの共同体」をキリストが実現されたとの理解に達し、そのキリストの実践と結びつくしとしての「洗礼」のみを「救い」の条件として考えるようになった。ただし、当初は、「律法」による「ユダヤ人共同体」の外形的な枠組みである「割礼」や「食物規定」を一部でも認めることが、キリストによって実現された包摂的な「救い」を台無しにしてしまうこととみなして、強く非難していた。これが、従来の「ユダヤ人共同体」との関係を断絶しない者との対立の要因となっていた。パウロは主張を徐々に軌道修正し、「ユダヤ人」キリスト者と「異邦人」キリスト者を区別した上で、「キリストの体」と表現される包摂的な「救いの共同体」においては、もはや「ユダヤ人」が「律法」によって「ユダヤ人共同体」に縛られる理由はない、と主張するようになった。

・日課箇所の後半の議論は、「律法」が人の罪を誘い、人を死に至らしめるものとなっている、という「律法害悪論」の根拠として解釈されることがある。しかし、日課箇所に続く箇所、パウロは、「律法は罪であろうか。決してそうではない」(7節)と言い添え、さらに「律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いものなのです」(12節)と断り、「律法害悪論」を慎重に退けている。日課箇所、「律法」が「死に至る実を結んでいる」と言われるのは、「ユダヤ人共同体」の一員であることを外形的に枠づけるものであるかぎりにおいて「律法」違反が「共同体」からの排除を意味し、その意味で「救い＝命」を失うことを意味する、というユダヤ教における理解を敷衍しているのである。

### 福音書日課(ヨハネ 8 章より)

・日課箇所は、いわゆる「姦淫の女の逸話」として知られるが、「共観福音書」では知られない逸話であると共に、「ヨハネ福音書」の古い写本でも欠けたものがあるために、福音書本文としての扱いは留保付きとされることがある(新共同訳では 7:53~8:1 を鍵括弧で括り、後代の加筆とみなしている)。実際、日課箇所は、前後の文脈展開を阻害するように割り込ませられていることが明白であるし、その文体や思想は、「ヨハネ福音書」全体の傾向よりも、「ルカ福音書」のそれに近いと一般に考えられている。

・日課箇所冒頭(3 節)に登場する「律法学者(グランマテウス)」は、「共観福音書」では繰り返し登場させられるが(マタイ 22 例、マルコ 21 例、ルカ 14 例)、「ヨハネ福音書」ではこの 1 例のみである。「共観福音書」では、日課箇所にあるように、「律法学者」と「ファリサイ派の人々」がセットで登場するのが常であり、「ファリサイ派の人々」と主イエスの対立がもつばら、彼らの「律法学者」との「律法」論争として生じていたことであつたように印象づけられている。他方で、「ヨハネ福音書」は全体として、「ファリサイ派の人々」と主イエス(および弟子たち)を対立的に描くことに抑制的であり、対立した相手方を「ユダヤ人たち」として描く傾向が強い。このようなことも、日課箇所が「ヨハネ福音書」の中で例外的な箇所として扱われる理由となっている。

・日課箇所、女を連れてきた人々が主イエスに向けて吹っ掛ける論争形式は、「共観福音書」が「皇帝への税金」を巡る論争で用いた形式と類比される(マタイ 22:15~22 ほか)。すなわち、二者択一が迫られるような問題設定をしながら、どちらを選択しても非を責められるような二重拘束(ダブルバインド)の手法によって、論争を有利に進めようとする形式である。

・論争の題材とされている「姦淫」に関する規定は、「十戒」の第七戒「姦淫してはならない」、またこれを敷衍拡大したレビ記 20 章、申命記 22:22 以下などに典拠がある。「律法」の規定によれば、姦淫を犯した場合、男女とも死刑とされるはずであるが、日課箇所では女だけが引き出され、罪を問われている。

・この場面の中にある、主イエスが沈黙を守って「かがみ込み、指で地面に何か書き始められた」という描写については、通説的な解釈が知られず、難解とされる。英雄神話ではしばしば、大地に触れる行為が世界の神聖性と一体化を意味するものとして描かれるが、日課箇所ではそのようなことを示唆するものはない。モーセが「石の板」に「掟」を刻んだこと(出 34:28)を敷衍して、主イエスが「大地」=「人の世界」に「神の言葉」を刻まれたことを示唆しているのかもしれない

### 来週の誕生日 (8月18日~24日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-208「主なる神よ、夜は去りぬ」(= I 24「父のしみよ、夜は去りて」)は、10 世紀にさかのぼるラテン語聖歌で、従来、6 世紀末の教皇大グレゴリウスの作とされていた。曲は、17 世紀フランスの聖歌集所収の曲を転用。
- ・21-14「たたえよ、王なるわれらの神を」は、19 世紀以来イギリスの代表的な讃美歌の一つ。作詞のライトは英国教会司祭で 21-218 番「日暮れてやみはせまり」(I 39 番「日くれて四方はくらし」)も作詞。作曲のゴスは英セント・ポール大聖堂のオルガニストや王立音楽学校の教授を務めた教会音楽家。
- ・21-501「主よ、私たちは祈ります」は、『讃美歌 21』編纂のために公募されて収められた日本人の作詞作曲による新しい讃美歌。作詞は中学英語教師であつた深沢秋子で、429 番も作詞。

#### 21-208「主なる神よ、夜は去りぬ」

#### Nocte surgentes vigilemus omnes

1. Nocte surgentes vigilemus omnes, / semper in psalmis meditemur atque / viribus totis Domino canamus / dulciter hymnos,
2. Ut, pio regi pariter canentes, / cum suis sanctis mereamur aulam / ingredi caeli, simul et beatam / ducere vitam.
3. Praestet hoc nobis Deitas beata / Patris ac Nati, pariterque Sancti / Spiritus, cuius resonat per omnem / gloria mundum. Amen.

#### 21-14「たたえよ、王なるわれらの神を」

#### Praise, My Soul, the King of Heaven

1. Praise, my soul, the King of heaven, / to the throne thy tribute bring; / ransomed, healed, restored, forgiven, / evermore God's praises sing. / Alleluia! Alleluia! / Praise the everlasting King.
2. Praise the Lord for grace and favor / to all people in distress; / praise God, still the same as ever, / slow to chide, and swift to bless. / Alleluia! Alleluia! / Glorious now God's faithfulness.
3. Fatherlike, God tends and spares us; / well our feeble frame God knows; / motherlike, God gently bears us, / rescues us from all our foes. / Alleluia! Alleluia! / Widely yet God's mercy flows.
4. Angels in the heights, adoring, / you behold God face to face; / saints triumphant, now adoring, / gathered in from every race. / Alleluia! Alleluia! / Praise with us the God of grace.